

## 2012年度学術交流支援資金報告書

**研究課題名：**CB 認知・行為・メディアと言語・言語教育

**研究代表者氏名：**長谷部葉子

**所属・職位：**環境情報学部・准教授

**研究課題：**本研究は、申請者らが2008年度より継続してきている、アフリカ中西部コンゴ民主共和国キンシャサにおける小学校建設・運営事業を拠点に、日本の大学生がコンゴの大学生と交流しながら、さまざまな形で日本語・日本文化を現地に伝達し、また現地の言語・文化を受容し、その望ましい関係性構築の在り方を学校建設・運用の現場で、実践的に検証する。本案件では、日本の大学生が夏に2週間現地に渡航し、現地の大学生と一緒に建設・教育活動をすでに4年間継続してきており、5年目の本年度は、秋にコンゴ国立教員大学の教員を2週間日本に招聘し、コンゴ国立教員大学の日本語修了者3名を日本での3ヶ月間の研修に招聘した。これにより、双方向性の相互理解から生まれる「協働体制の持続可能性」、というテーマを掲げ、活動を通じた異言語・異文化交流の望ましい関係性構築を研究課題とした。



### 【本研究の現状説明】

本研究プロジェクトは、2007年から始まり、5年目を迎える。アフリカコンゴ民主共和国首都キンシャサ郊外のキンボンド地区にアカデックスという私立小学校を建築・運営するもので、世界最貧国といわれる、コンゴ民主共和国の「国の復興は教育から」、日本の学校運営方式を導入した、自律型の小学校モデルを作り、普及させるという趣旨で始まった。これは、コンゴ人設立者慶應義塾非常勤講師のサイモン・ベテロ氏の起案で、慶應義塾総合政策学部の松原弘典が設計分野を、同じく環境情報学部の長谷部葉子が教育分野を担当し、地域一体型で、段階的に学校を作り上げてゆくハードとソフトの両面からの取り組みである。

1年に1棟の校舎建築、1学年ずつ入学させ、カリキュラム、運営も1年ごとに深め、地域を巻き込み、積み重ねられてきた。2009年開校当時は、1学生のみ8名からのスタートだったが、2012年現在は幼稚園、1学年から4学年まで208名の生徒数、教職員数10名、校舎数3棟（図書室を含む）、水洗トイレ男女別2か所、アーチ型の校門を備えた小学校として、安定した学校運営を行っている。学費徴収、教職員の給料支払い共に遅延なく現地スタッフにより、学校経営が行われ、周囲からも信頼されてきた。開校当初と比べ、地域住民の教育に対する興味・関心が高まり、2012年度現在では、より質の高い初等教育の重要性を地域の住人から聞かれるようになり、さらにアカデックス小学校卒業後の進学先として、アカデックス中学校開校を希望する声も多くの父兄から聞かれるようになった。本プロジェクト5年目にして、地域が一体となって共につくる学校への協力体制への意識と意思が生まれてきたといえる。

2008年から今日に至るまで、毎年慶應義塾の建築と教育領域の学生が20名前後2週間近く滞在し、共に校舎を建築し、共に学校カリキュラムを作り上げてゆく協働の形が現地に受け入れられ、定着してきた。また2011年度からは、サマーキャンプと称して、コンゴ民主共和国の国立教員大学の学生とともに、日本語授業、小学校でのワークショップを共に実施したことも現地に大きな実績として評価された。周辺地域からも日本と融合型の小学校のモデル校として見学者が多く訪れるようになってきている。またこの学校運営の安定に伴い、2012年度からソニータブレット50台、日立の電子黒板融合型プロジェクターの導入により、無理のない、段階的なICT教育が実現した。

また上記のサマーキャンプに先駆けて、2011年度より国立教員大学英語科大学院生対象に岩崎メソッドによる日本語クラスを開講、3か月間、日本語基礎と日本文化紹介を行い、8月のサマーキャンプを経て、秋からは、新たな日本語基礎クラスと初級クラスの2クラスを開講し、2012年3月には初級クラスの成績優秀者を対象に日本語フィチャーズトレーニングを開講し、3名のコンゴ人大学院生が日本語基礎コースの教授資格を獲得した。長谷部研究室からは2012年2月下旬から、2011年6月からの2名の長期渡航者に加え、さらに2名の長期渡航者（1年間滞在予定）が加わり、2012年4月から、日本人+コンゴ人6名が共に、2クラスの新たな日本語クラスを開講し、順調に運営している。

2011年末には、現在に至るまでのアカデックス小学校プロジェクトの実績が認められ、在コンゴ日本大使館にサポートのもと、日本コンゴ文化交流センター建設案を外務省草の根文化無償助成金で申請し、採択された。これにより、国立教員大学ISPゴンベの敷地内に順調に建設中で、2013年3月11日に開所式を迎える予定である。ここからが本格的なコンゴと日本の協働プロジェクトの始まりであり、より深化した相互理解を目指して2012年10月にコンゴ国立教員大学の教授一名と日本語履修者3名の日本への招聘が実現した。

以上の本件の現状を踏まえて、以下から報告書とする。

本報告書は、2012年度学術交流支援資金申請書作成時に記述した、4つの研究目的に即してその成果を報告するものである。

#### 【4つの研究目的とその成果】

1. 建築を通じた、環境教育の導入：学童参加型学校づくり。
2. 学校のメンテナンスを授業カリキュラムに導入：学校関係者一体型のメンテナンス体制づくり

松原弘典研究室では、渡航メンバーを1ヶ月間の長期渡航者と2週間の短期渡航者に分けて、日干し煉瓦の製造、そしてその煉瓦を用いた、正門アーチと塀づくりを行い、正門アーチを完成させた。本年度の松原弘典研究室では、地域、保護者、学校関係者、学童が一体となって、学校づくりの一端を担い、持続可能な自分たちの学校のメンテナンスを日常的に作る、ある意味で一歩進んで「日常をつくること」を研究課題として掲げた。滞在期間中に約2000個の日干し煉瓦を現地の関係者全員で作り上げ、そして出来上がった日干し煉瓦を用いて、学校の正門のアーチを新学期開始直後に完成した。様々な段階で年上の学童が無理のない参加をしての作業が進み、また正門のアーチ建築には、地域の人たちの注目が集まり、同じ入り口から、心を同じにした人達が出入りするというメッセージが明確になるとともに、自分たちが学校の正門を作ったという誇りがうまれた。またこの日干し煉瓦づくりを小学校の教育カリキュラムに技術・家庭授業の一環として取り入れ、次の新校舎の建設には、学校で作った日干し煉瓦を用いることが次のステップとして用意されている。地域及び学校関係者が自分たちで取り組み学校づくりという意識が、誰にでもわかりやすく、形になった大きな第一歩となった。また日干し煉瓦作りを通じて、自分たちの身の回りの環境と建造物との調和、自分たちが望む建造物の形などへも興味・関心が向けられるようになった。



長谷部葉子研究室では、学校で日常的に使われるもののメンテナンスを自分たちで行い、日常的な消耗品を自分たちでつくることを小学校のカリキュラムに導入するために、使い古された黒板の塗料による修復作業とチョーク作りを実施した。「黒板が変われば学校が変わる」という熟練教師の名言を元に、本年度の研究課題を、自立的な学校のメンテナンスの持続可能性の保証に焦点を絞った。具体的には、渡航前に渡航メン



パーが株式会社青井黒板製作所と株式会社馬印（日本で一番古いチョーク会社）の工場での研修を受け、日本での昔ながらの塗料による、黒板修復作業と、子どもでも簡単に作れるチョーク作りを現地でのワークショップとして行った。また株式会社ソニーから150台のタブレットを提供していただき、黒板修復とチョーク作りの映像マニュアルを作成して、日常的に取り組めるように形を残した。ネット環境がまだ整備されていないため、ネット接続は困難であっても、日常的な記録作り、授業運営に役立つタブレットの利用法を現地教職員と検討し、電源の入れ方、ケーブルの接続の仕方にはじまる基本的な使用方法も研修として実施し、現地教職員から非常に喜ばれ、日々積極的に授業にタブレットが導入されるようになった。また現在各授業では、修復後の黒板で、自分たちで作ったチョークが使われている。本年度の取り組みにより、まず学校の基本となる「黒板とチョーク」の継続的メンテナンスの学内での定着と普及が見込まれるようになった。またメンテナンス作業を学校カリキュラムの中で行う上で大切になってくる、自分の意志を表現しての話し合いのコミュニケーション環境づくりの一環として、絵を書いて自分のお話を語るワークショップや、ダンスによる自己表現を楽しむワークショップ、またチームワークや判断能力を養うスポーツとしてアルティメッツ等を実施し、これもタブレットに全ての記録し、継続的な実施が可能な形を残した。また校歌もつくり、一緒に毎日歌うことで、小学校への帰属意識を高め、アカデックス小学校生としての誇りと自覚を促した。



### 3. 保健・衛生教育、定期健康診断の導入：学童の命をまもる教育の第一歩

マラリア・ポリオ等の感染症または、栄養失調等で命を落とす学童が多いアフリカ地域で、アフリカ政府は小学校における定期的健康診断を義務付けている。しかし、現状は医療機関と教育機関の連携は取られず、学校での教職員、保護者、学童への保健・衛生指導は実施されていない。そこで、2012年度から、医学部の安井教授（小児科）と武林教授を中心とした有志で構成される慶應アフリカ医療研究会から3名の医学部生が新たにプロジェクトに参画した。これにより、アカデックス小学校の教職員、保護者に対して、学校環境、家庭環境を調査し、保健・衛生指導を行い、「予防対策」を徹底する拠点づくりの「入り口」が実現した。本年は初年度であるため、保健衛生指導として、衛生教育を題材にした紙芝居や劇を子どもたちにみてもらい、楽しく学んでもらった。実はこの衛生教育の試みは2012年度で3年目になる。また現地の健康事情の調査として、ママココという大規模な小児病院と併設される児童養護施設を複数回に亘って訪問し、現状把握を行った、また同時にアカデックス小学校の有志学童の家庭訪問を行い、家庭環境を学び、家庭生活の中での子どもの食事情や母親への健康面でのヒアリング調査を実施した。9月新学期開始直前に、安井教授を迎え、アカデックス小学校全校生徒、教職員を対象に、第一回定期健康診断を実施した。各自に健康手帳を作成し、身長・体重・胸囲・握力・視力・体温・安井医師による診察を実施し、現在の成長度合、栄養状況、健康状態を把握し、保護者への報告と必要に応じて改善指導を行う第一歩が実現した。この定期健康診断は、2012年度から毎年夏に慶應アフリカ医療研究会がアカデックス小学校で実施し、学童の成長・健康状態を考慮し、段階的な給食制度、保健・体育授業のカリキュラム策定へとつなげてゆく入口が実現した。





#### 4. 言語・文化交流による相互理解の深化、協働体制の確立：国立教員大学との連携

2011年度からの日本語授業開講により、コンゴの教育、建築、さらにはアカデックス小学校関係者に日本語話者が増え、一方日本人渡航者からも現地のリンガラ語話者が増えてきた。これにより、共通言語が英語、日本語、リンガラ語とコミュニケーション手段が拡大し、より相互への理解、関心が高まり、協働プロジェクトの推進が円滑になってきた。



2012年度は、新たな医学部の参画、建築、教育分野の日コ双方の新規履修者を交えて、教員大学の日本語履修者1期生と日本の長期滞在者が協働コーディネーターとして、異言語・異文化交流と理解を深めるサマーキャンプを実施した。このサマーキャンプも2年目を迎えることで、より具体的な協働体制をアカデックス小学校の教職員にも明示する絶好の機会となった。特にコンゴ人側で日本語話者、日本人側でリンガラ語話者が育成できたことにより、協働プロジェクトとして不可欠な「話し合いの場」の日常的に一日に何度も設けられ、「すぐ、その場」での「意思の疎通」、「問題発見・問題解決の共有」が可能になり、コンゴ人と日本人と一緒に取り組んでいるという日常的な一体感が5年目にして初めて実現した。これにより、株式会社日立ソリューションズより提供していただいた、電子黒板併用型プロジェクターと書画カメラ等の使用法から、その効果的な授業導入の紹介、授業運営の検討などが、活発な意見交換によって始められるようになった。これにより、コンゴのアカデックス小学校と日本の公立小学校及び幼稚園とのオンライン交流の接続実験や、交流授業計画などがより現実的に議論されるようになった。



とはいえ、協働を実践する場は2012年に至るまで常にコンゴ民主共和国に限定され、日本的な学校運営や、管理体制、日本人の日常的な価値観の共有は堪能な日本語話者が増えても、やはり相互理解に苦しむ側面が多く、それが協働の実現を阻む一要因でもあった。そのため、2012年10月11日からコンゴ国立教員大学英語セクションからカバタ教授を2週間日本に招聘し、慶應義塾湘南藤沢キャンパスでの講義、日本の小中高等学校などの教育機関訪問を経て、日本の言語文化への理解を深める交流プログラムを実施した。また同時期から上記コンゴ人日本語履修者1期生3名を3ヶ月間日本に招聘し、担当教員である長谷部と生活を共にした。日本滞在中は、上記教育機関での日常的な実習と岩崎メソッドによる日本語教員育成トレーニングを受講し、また株式会社トヨタ、株式会社ソニー、株式会社馬印、株式会社青井黒板製作所等を訪れた。また石巻や女川の被災地や京都、広島も訪れ、東京と鎌倉に居住した。この経験をとおして、日本理解を深め、日本とコンゴ相互の協働のあり方を両国における共通認識を元に、論じ、模索し、深化させる貴重な機会となった。



またコンゴ民主共和国は日本にとって物理的にも心理的にも遠い、イメージし難い「異国の地」であり、今回コンゴからの4名の招聘者を迎えられたことで、日本でのコンゴ民主共和国への理解、というよりは、もっと大きく言えばアフリカ理解への扉を大きく開くきっかけを作ることができた。この過程における、コンゴ人、日本人関係者の意識変容・態度変容は大きく、異文化間屈折という社会心理学的側面からも非常に大きな成果を得ることができた。招聘者を日本に迎えたことで、コンゴでよりも、むしろ本格的なアフリカ地域に対する啓蒙活動を日本で実現できたと言える。

ここからは、本研究の報告書の結びとなるが、現地での2008年からの継続的な取り組みであるため、現地での日本に対する認知度と関心が安定したものとなり、より日常的な関係性

をつくりやすくなった。また日本語教育を国立教員大学で実施したことが、日本のプロセスの明確化につながり、教育から「人の流れをつくり」、建築から「人の集まる場を提供し」、学校づくりを通して、「協働」という概念を、「目に見える分かりやすさ」で明示している。この関係者各人への「わかりやすさ」が、現地でのさらなるプロジェクトの深化と普及、定着につながっている。つまり、本研究の特色である以下の4項目、小学校建設を拠点にするという実践性、さまざまな伝達内容を扱う多領域性、そして、コンゴ民主共和国という地理的な新奇性、さらに双方の言語習得と文化理解から生まれる共感性、これらがまさにコンゴという地域性の中でほどよく一つに融合したのが、2012年であったといえる。

## 2012年度の実績

- 2012年10月 アフリカ医療研究会報告会 慶應義塾医学部信濃町キャンパス
- 2012年11月 2012年慶應義塾SFC六本木ミッドタウンOpen Research Forum  
ポスターセッション出展、トークセッション企画実施

[http://matsubara-labo.sfc.keio.ac.jp/2012congo\\_session.pdf](http://matsubara-labo.sfc.keio.ac.jp/2012congo_session.pdf)

- 2012年12月【報告会】コンゴで私は家族に出会った ～コンゴミュージックとトークと映像で知るコンゴ～ 神奈川県立地球市民神奈川プラザ

<http://www.earthplaza.jp/?p=10419>

- 2012年2月 【開館15周年記念】シンポジウム「セイン・カミュ氏と国際協力について語ろう」 神奈川県立地球市民神奈川プラザ

<http://www.earthplaza.jp/?p=11207>

\*「コンゴAcadex小学校プロジェクト」

[http://hasebeken.sfc.keio.ac.jp/congo\\_acadex/index.html](http://hasebeken.sfc.keio.ac.jp/congo_acadex/index.html)

ジャパンデザインネット デザイン系のネットマガジン

[http://www.japandesign.ne.jp/report/121205\\_congo.html](http://www.japandesign.ne.jp/report/121205_congo.html)

## 2012年活動報告動画

[http://youtu.be/EcbJYGIVQcl\(3min\)](http://youtu.be/EcbJYGIVQcl(3min))

[http://youtu.be/bbxtnEQ8i38\(20min\)](http://youtu.be/bbxtnEQ8i38(20min))

文責：長谷部葉子